

## 結びに

以上に、コートディヴォワールの作家ベルナール・ダディエと、ヴェロニック・タジョーを取り上げ、西アフリカのフランス語で書かれた文学について考察した。ダディエは植民地期の 1950 年代に作家になった。タジョーは 1980 年代に最初の作品を出版し、2000 年代の現在まさに活動している作家である。二人は、世代も性別も、受けた教育も生育環境も異なり、タジョーは混血という出自を持つ。けれども 3 章から 6 章で見てきたように、彼らの執筆活動を歴史的な文脈も踏まえながら辿ると、時代背景が異なりながらも、二人は共通する主題や題材を扱ってきたことがわかる。本稿では、二人の作品と、関連する主題を扱う他の作家の作品を比較して読み解きながら、この地域でのフランス語文学の誕生から約五十年の歩みを浮かび上がらせることを試みた。そしてそれによって、この地域で作家であるとはどういうことなのか、外国語であるフランス語で書かなければならない状況は続くのに、作品が生まれ続けているのはなぜなのかを考えてきた。

このような問いのもとに二人の執筆活動を考察し、明らかになった共通の特性はまず、両作家の諸作品では、想像によって再構成されたものだとしても、それぞれが生きたり、目撃したりしたアフリカの社会的な問題や出来事が描かれているということである。

ダディエの場合は、たとえば『克蘭ビエ』で、フランス領西アフリカを舞台として、植民地システムが確立された 1920 年代から、脱植民地期の 1950 年代を取り上げた。それはアフリカ人が厳しい支配を受け、植民地化によって変化した社会構造のなかで暮らしていた時期から、やがて戦後に反植民地運動が盛り上がった時期までである。まさにこの時代に少年期から青年期までを過ごしたダディエの人生を振り返ると、彼は彼自身が見て、関わったばかりの出来事をすぐに小説の題材にしたことがわかる。いっぽうタジョーの『戦いの場 愛の場』の舞台は現代のアフリカの都市で、そこに描かれる社会は長期的な経済危機や、国民を抑圧する政治に疲弊している。そのうえ主人公たちは、多数が虐殺される紛争がアフリカ大陸で勃発していることに衝撃を受け、同じことが自分の国でも繰り返されそうな気配を感じている。アフリカ大陸の今日の情勢を思えば、この内容はアフリカのさまざまな国に重ねて読むことができるが、とりわけ、タジョーが自ら訪れて取材したルワンダでの 1994 年の大虐殺や、彼女の国コートディヴォワールで 1990 年代後半に政治的に醸成された排外的な社会感情がここに反映されていることがわかる。この作品に限らずタジョーは、諸国の独立後数十年を経て、植民地支配や新植民地主義ということだけでは

説明のつかない、さらなる貧困や感染症の広がり、政治的な混乱と暴力、紛争という問題を抱え、グローバリゼーションの作用をまともに受け、それなのに諸問題の解決の糸口が見えない、そのようなサハラ以南アフリカの状況を取り上げてきたのである。

二人の作家のもう一つの特性は、書くことが、上述のような社会情勢を前にした自分について考える手段にもなっていることである。ダディエの小説『克蘭ビエ』では、ダディエが実際に暮らした植民地社会がつぶさに描かれるうえ、主人公克蘭ビエの経験や政治的な覚醒は、ダディエ自身のものに重なる。また1980年に発表された『トロ行政官とそのニグロたち』には、反植民地運動と挫折、独立時にフランス人から権力を譲り受けたアフリカ人への批判が読み取れるが、ここにはダディエの実現されなかった理想や希望への思いも読み取れる。彼は、出来事やそれに関わる経験を書きながら再構成し、それらとの関係で自己を考察したのだと考えられる。タジョーの場合も、とりわけ最初の作品『ラテライト』に、混血という出自に悩んだ彼女の自己探求と、意識の転換が書かれたと考えられる。またこの作品には、自らのアイデンティティとは何かと悩んだタジョーが、自分というものはさまざまな人や文化、物事との出会いのなかで形成されていくし、そのように自分を練り上げ続けたいと考えるようになった、彼女の心の軌跡が読み取れる。以降彼女の作品では、『鳥瞰』や『戦いの場 愛の場』の人物たち、『イマナの影』や『女王ポクー』の語り手たちのように、現代社会の問題に圧倒され、迷い、苦しみながら、乗り越える方法を模索する、タジョー自身のような人物が登場する。『ラテライト』執筆以降のタジョーにとって、作家という仕事は、自分自身について、自分が関わる世界について、探求する方法なのだ。

ダディエとタジョーの上記二つの特性を合わせた執筆の姿勢は、西アフリカのフランス語文学の起源であるネグリチュード運動から引き継いだものだと考えられる。1章1節で見たように、この運動ではフランス植民地出身の黒人知識人たちが、同化を拒否し、自己表明する根拠を求めて、自分自身について、「黒人」を差別する世界について、書いて掘り下げ、抉り出すという作業を行った。ヨーロッパ文明が世界を覆ってしまった後に支配を受け、同化教育を施され、自らのことさえ支配者の視点でしか見られなかった彼らには、書くことだけがそのような自分について考えを深められる場だった。フランス領西アフリカで教育を受けた開化民たちは、まさにこのネグリチュード運動から影響を受け、フランス語文学を書いたのである。ダディエも、サンゴールやダマスといったネグリチュード作家たちとの直接的な交流のなかで刺激を受けた。開化民たちはこうして、ネグリチュード

の作家たちが実践したように、歴史的、社会的条件の中にいる自分自身について書き、表明したのである。いっぽう現代作家のタジョーは、自己探求をした最初の作品にすでにアフリカの社会問題への眼差しが読み取れる。だが彼女は、とくに 1990 年代以降に勃発した紛争に若者たちの人生が翻弄されているのを前に、「私は自分をネグリチュード運動の継承者だと考えています」と表明した。ネグリチュード作家たちが出身地を越えて議論したように、現代アフリカ人ももう一度、自らのアイデンティティについて、アフリカ大陸の未来について議論することが必要だと彼女は考えている。そして彼女の作品執筆の根底にあるこの思いは、ルワンダの大虐殺の後にプロジェクト「ルワンダ 記憶の義務として書く」に集まった作家たちを始めとして、他の現代作家たちに共有されている。

このようなものである西アフリカのフランス語文学誕生には、1 章 2 節～4 節で見たように、就学経験も深く関わっていると考えられる。この地域では、教育事業の目的や内容、その結果も、上述のような姿勢で書く作家を登場させる要因になってきた。

植民地期に開化民たちが文学作品を書いたのは、まずは就学してフランス語の読み書きを学び、文学というものがあると知っていたからだった。アフリカの多くの地域では伝統的に、人々の記憶や経験などの情報は、伝承という形で残すものだったので、書いて表現するという事は、就学した人々が始めたことだった。しかし彼らが、自分は植民地社会ではどのような人間なのかとか、植民地社会とはどのようなものかなどと、書きながら考えようとしたのもまた、就学したからこそだった。というのは、植民地での就学、つまり一方的にフランスに同化させ、植民地の運営に必要な人材として育てる訓練を受けることは、フランス語という外国語を身につけ、ヨーロッパの歴史や文明について知識を得て、生まれ育った社会の文化や生活からは引き離される経験だったからだ。彼らはこのため、もはや就学を経験しなかった人々と同じ眼差しで周りの世界を見ることはなく、意識も異なる人間になったのである。そして同時に、同化教育を受けたとはいっても、権利のうえでは決してフランス人にはなれないことも思い知らされたのだ。こうして第二次世界大戦後に、書くことに向かう人々が開化民の中から現れたのである。アフリカ人を取り巻く政治的な環境が大きく変化する中、開化民は植民地社会やそこでの経験、それまでの自己形成について小説という形式で書いて振り返り、その意味を知ろうとしたと見ることが出来る。ダディエの『クランビエ』に描かれた、アフリカ人にとってはまったく新しい経験のなか、自分は誰のために、何者として生きるのかを熟考せずにはいられなかったクランビエの姿とは、この時代の多くの開化民の姿としても読めるのである。

ところがフランス領西アフリカだった地域では、独立後も教育は作家たちを生み出す要因であり続けている。この地域では、独立後も諸国が旧宗主国と維持した関係のために、公用語や教育言語としてフランス語が採用されたこと、現地の多くの言語では書記法が確立、普及していないこと、国内の出版社が困難を抱えていることなどが理由となって、現在でも多くの作家たちはフランス語で文学作品を書き、フランスから出版している。しかし多くが高等教育を受けたエリートである現代作家たちの作品では、作家同様に就学経験のある人物が社会での孤立感を吐露したり、自分自身のことや、他の人々との関係について苦悩したりするのを読むことができる。タジョーの『戦いの場 愛の場』もそのような作品で、知識人の主人公エロカは、自分の出身地にいながら、他の人々との間に感じる認識や価値観の違いにどう向き合えばいいかわからない。そのうえ彼は、貧困、民主主義とは程遠い国内政治、教育の荒廃などについて考察する知識を持ち合わせているが、その解決には何の役割も果たせず、無力感を持っている。この地域では、就学して西洋の知と価値観を身につけ、西洋的に暮らし、アフリカの外にも実際に出かけることができる少数の人々と、そうではない多数の人々との間の知的、文化的、社会的、経済的な格差が存在するのに、それはすぐに解消されそうもなく、ますます広がっているようにさえ見える。就学経験者たちは、そうしたなかで生きる自分の立場や現状について、書いて整理したり、解釈を与えてみたり、何らかの苦悩を吐き出したりせずにはいられないのだと見られる。植民地期に書かれた『克蘭ピエ』では、克蘭ピエは故郷の人々との結びつきを強く感じているし、同時代のアミドゥ・カーヌやカマラ・ライが書いた小説でも、主人公たちは故郷の文化や宗教は自分の出発点であることを意識している。しかし現代アフリカ文学の就学経験がある主人公にとっては、故郷は自分をつなぎとめる場所ではなく、そこにいても、奇妙な振る舞いをする異邦人か、その国を永遠の居場所とすることができない亡命者のようだ。タジョーの『鳥瞰』や『戦いの場 愛の場』には、高等教育を受けた人物のそのような姿を読むことができる。5章1節3)で参照したコートディヴォワールの作家ファトゥ・ケイタの『そして夜は明けた…』の女性主人公シナもそうした人物である。裕福な家庭に生まれ、ヨーロッパで高等教育を受けた彼女は、気まぐれから物乞いの孤児を引き取るが、街で大勢見かける同様な子どもの過酷な生活環境を知るにつれて愕然とし、自分の暮らし方を恥じるのである。就学経験者の意識や感覚が、他の人々とあまりに隔たっていて、その状況が続いていくしかないなら、就学経験者は二つの世界の狭間で葛藤を繰り返すしかなく、彼らの苦い思いそのものがこれからも文学作品になっていくと考えられ

るのである。

作家たちがこの地域で文学作品を書いてきたのは、植民地期から現在に至るまでの厳しい現実にも理由がある。作家たちは、身の回りの出来事や状況を動機として書き、それによってアフリカが少しでも良い方向に進むことを望んでいるのだ。たとえばダディエは植民地支配に抵抗し、その経験をもとに作品を書いた。彼は、植民地期や独立後の社会問題に読者の意識を向けさせたり、それらと読者との関係に気づかせたり、あるいは行動なり、観点の転換なりを読者に引き起こしたりするのを意図していた。いっぽう今日でも、作家たちは作品で直接的に政治的な立場を示したりはしないけれど、1章4節で紹介したブルキナファソのベルナデット・ダオのように、女性の苦悩を取り上げ、辛い思いをしている読者を支えたり、読者が問題意識を持つきっかけを作ろうとしたりしている作家がいる。タジョーにとっても、現実の出来事とりわけ現代の紛争は、いくつかの作品の執筆動機であり、彼女はアフリカで紛争が繰り返されないよう、作家としての力で役割を果たしたいと考えてきた。ルワンダを訪問して作品を書いた作家たちや、2章2節6)で紹介したセネガルのケン・ブグルも、作家としての能力を使って現実に働きかけようとしている書き手たちである。

ただ独立後の作家たちは、以上のように旧宗主国の言語でいまだに文学作品を書くことに罪悪感や不満を持っていて、それでも、うえのような理由で作品を書き続けているということも忘れてはならない。1章4節で見たように、ケニアの作家グギが主張したとおり、それぞれの作家が自分の言語で作品を書き、同じ言語を使う人々がそれを読めるようにすれば、書かれたことは一つの社会のあらゆる階層に理解されるはずである。しかし2章2節6)でも紹介したセネガルの作家ブバカル・ボリス・ジョップによると、彼は母語のウォロフ(wolof)語でも書いていて、それは語りかけたい相手に作品を届ける手段なのだが、多言語社会であるセネガルでは、ウォロフ語作品の普及を一種の民族主義とみなし、脅威を感じる他の言語の話者もいると述べている<sup>777</sup>。コートディヴォワールも含めてアフリカの多くの国が同様だが、一国内で多数の言語が話され、各言語の書記法が確立されておらず、出版・流通の困難があり、さらには教育が行き渡ってはいない国々では、各作家が母語で書くという状況は、すぐに実現するとは考えにくいし、すべての言語で可能だとも考えられない。そのうえ、もし実際に多様な言語が教育言語になり、流通したなら、アフリ

---

<sup>777</sup> Cf. Diop 2007.

カ諸国は乗り越えるべき共通の課題を多く抱えるのに、国内でも、アフリカ大陸全体でも、人々が意見や知識を交換し、共通の認識で行動することがますます困難になってしまう。現代作家たちはこうしたなか、どのようにアフリカの人々自身に作品を届けるのか、他者の言語を使ってアフリカ人の意識や、アフリカの文化や自然に深く根ざした作品を書くことはできるのか、という課題を抱えている。

西アフリカで植民地期から現代に至るまで、作家たちがフランス語で文学を書いてきた背景や条件には以上のように共通した点がある。しかし、ダディエとタジョーの作品を読み比べると、上述のように現実の状況が作品に映し出されてはいても、それをどのようなものとして表現するかということには大きな違いがある。

ダディエの『クランビエ』では、植民地社会の仕組み、社会階層ごとの暮らしと心理が具体的に描かれて過酷な支配の実体が炙り出されるとともに、反植民地運動の活動家としてのダディエの観点と経験が直接的に映し出されたこの作品では、「黒人」、「アフリカ人」の代表としての主人公は植民地社会を揺さぶる運動に身を投じ、アフリカの解放はやがては実現しそうである。読者はここでは、作家の描き出す抵抗と解放の思想を読み誤ることはない。

これに対して現代作家タジョーの諸作品、たとえば『戦いの場 愛の場』では、主人公たちは傷めつけられ、欠陥ばかりが見え、出口が見えない社会で生きているのに、運動によって現存の社会を大転換すれば問題が解決するとはもう考えられず、そのうえ人種や国籍、民族というアイデンティティによって周囲の人々とのつながりを確認することもできない。このような作品の主要な内容は、どうしようもなく荒廃していく社会を見ている主人公たちの、独白という形で書かれる辛さや無力感、自己考察である。そしてそれらは、いくつもの意味や解釈を引き出せそうな表現で書かれているので、読み手はそれを追い、もっとよく理解しようとするうちに、混乱し、迷い、苦悩する人物たちの内面に引き込まれるのである。

二人の作家の表現のこうした違いの背景や理由は、4～5章で、コートディヴォワールのポクー伝説を題材にした作品を読み比べながら考察した。ダディエは植民地期に、彼の出身地の伝承の一つだったポクー伝説の中心に「民を救うために子どもを犠牲に差し出した女王」という主題をすえ、アフリカ人が自分自身や自らの文化を肯定的に意識できるような作品として書いた。これは、当時は被支配者だったアフリカ人に、今あるものとは異なる現実もあると語りかけ、抵抗を勇気づけたはずである。いっぽうタジョーが、そうし

たものとしてコートディヴォワールで普及したポクー伝説を再解釈して書いた『女王ポクー』では、複数のポクー像が、多様な解釈の余地を残すような言葉で書かれた。タジョーは、ダディエが書き起こしたポクー伝説の主題が、執筆当時には、アフリカ人たちが互いの絆や偉大な過去とのつながりを確認するために役割を果たしたのに対して、今日では、自分自身や他者の犠牲を語るこの伝説は危険な役割を果たす恐れがあると考え、再解釈したのだ。彼女は、伝承の読みがこの主題とともに固定されてしまったことを批判し、現代におけるポクー伝説解釈を示し、ポクーを伝承の世界にとどまらせようとしたのだ。同時に、このような表現で書きかえられた伝説は、アイデンティティを使った権力追求が行われ、伝説を含めて多様な言説が人々の心に影響を与える今日のアフリカにおいて、流布している意見や観点も、その本当の意味は何かと多角的に検討する必要があると語りかけるかもしれない。タジョーは、文学の言葉が持つ、さまざまな境界をやすやすと超えさせてくれる力を駆使し、そのような作品を書こうとしたのである。それがタジョーにとっての、作家の仕事を通じた現実への働きかけ方なのである。

文学作品一般はこのように、読者がものを見たり、行動したりする方法に影響を与えるかもしれないものなので、これまでも多くのアフリカ作家たちが、過酷な社会状況を生きながら、体制を批判し、抵抗を呼び覚ますことも意図して作品を書き、そのために迫害を受け、沈黙を強いられた。タジョーが女王ポクーの作品を読み直したのは、文学を政治やイデオロギーから取り戻し、文学作品とは、豊かな世界へと読者を導いていくはずのものだと示す意味あいもあったと見られる。

ただしアフリカの作家たちにとっては、現実の政治情勢とどのように距離をとり、作品を書くかということは、今日でも自由に選び取れないような問題である。作家たちは、自分の国の政情がひとたび不安定になれば、どの側に立って活動するのか、選択を迫られるからである。この問題に関しては、ダディエの以下のような近況を書いておかなければならない。1916年生まれのダディエはすでにかかなりの高齢なのだが、2006年3月に現大統領の夫人シモーヌ・バボ(Simone Gbagbo)を事務総長とする政治団体「民主主義のための抵抗国民会議(Congrès national de résistance pour la démocratie : CNRD)」が立ち上げられたとき、ダディエはその議長に就任したのである<sup>778</sup>。当時コートディヴォワールは2002

<sup>778</sup> これについては、ここでは、インターネット上のダディエについての記事 *Abidjan Talk 2006* を参照した。また以下の記述では、佐藤 2005 とダディエについての記事(*Jeune Afrique 2007*)を参照した。

年 9 月以来の南北分断という状態にあった。フランスが主導する和平プロセスによって 2003 年 1 月にはマルクーシ合意が結ばれていたが、4 章 2 節 1) で見たように、この合意は、憲法改正など、次の選挙が行われればバボ大統領が政権を失いかねない内容を定めていた。このため合意は履行されず、バボ大統領はフランスに対する「政権ぐるみの反仏姿勢」<sup>779</sup>をあらわにしてきた。そのようなときに大統領夫人が主導した CNRD とは、憲法改正に反対し、バボ政権維持を支持するのを目的とした組織だったのである。ところでダディエは、今日でもコートディヴォワールではフランス植民地権力への抵抗を象徴する存在である。このため彼は、現代の反仏感情を国民に煽るための恰好の人材として、CNRD に担ぎ出されてしまったと見ることができる。現在南アフリカで暮らすタジョーはこの出来事について、混乱した国内にいる作家は中立を守ることが困難で、つねに自分がどちらの側につくかを問われてしまう、したがって「芸術家は、しっかり気をつけていないとならないのです。権力が取り込みをねらおうとしますから」<sup>780</sup>と語った。タジョー自身、国内でよく知られたボクー伝説の再解釈を提示できたのは、直接的な非難を受ける懸念のない場所にいたからこそだった。そんな彼女はいつぼうで、国外にいる自分は国の人々を裏切っていると、辛い気持ちを抱えているのではないだろうか。

こうした葛藤も抱えながら書いてきたタジョーの執筆活動を振り返ると、現代作家として、作品には今日のアフリカの困難への対応を書いてきたことがわかる。6 章ではそのような視点でタジョーの作品をもう一度考察し、ダディエとは異なる意識や意図が読み取れる主題や事項を取り上げた。そのなかでも注目すべきなのは、アフリカ大陸各地での激しい暴力の爆発を前にして、人間の心の仕組みにいたるまで探求し、他者の苦悩に耳を傾けることや受け入れること、寄り添って生きることを意味を問い続ける、タジョーの作中人物たちである。タジョーはこうして、アフリカ人同士の共生の道や、アフリカ大陸の活性化の方向性を自分自身で探求し、読者にも問いかけているのだと思われる。彼女はさらに児童文学作品の中でも、互いの違いを認め合い、尊重しあう関係のあり方を子ども達に向けて書いた。また、女性作家の歩みから見たタジョーは、作品で女性たちの苦悩を取り上げつつも、社会を動かしている権力の性質が変わらない限り、女性たちの困難も、ひいてはアフリカ全体の困難も終わりにならないことを描き出そうとしている。

<sup>779</sup> 佐藤 2005, p. 40.

<sup>780</sup> 2007 年 11 月 13 日のタジョーへのインタビューより：« Quand on est artiste, il faut faire très attention. Le pouvoir va chercher à vous récupérer. »



現代アフリカには紛争や暴力、貧困や教育の問題、女性たちの問題、感染症の拡大、食糧供給の困難など、深刻な問題が山積し、しばしばそこには当事国だけでなく周辺国や国際社会の事情が絡まりあっている。そのため、タジョーのように、個人として困難に向き合い、同時に現実への何らかの対処をする手段として、書くことを選ぶ人々はこれからも登場することと思われる。作家がそのように誕生していく様相は、たとえば現在のブルキナファソの文学創作状況にも、以下のように見ることができる<sup>781</sup>。

1960年に独立したブルキナファソでは、度重なるクーデターと政権の交代によって作家たちの活動が妨げられてきたため、文学作品が国内で継続的に出版されるようになったのはようやく1980年代のことだった。1983年に独立後四度目となる軍事クーデターが勃発した同国では、これを主導した将校トマス・サンカラ(Thomas Sankara : 1949-1987)が政権を掌握して「1983年8月革命」を宣言、さまざまな改革を進めた<sup>782</sup>。文化振興策もその一つで、同年には国民文化週間(Semaine Nationale de la Culture : SNC)が組織された。このときに開催された芸術作品コンクールでは、受賞作に国民芸術・文芸大賞(Grand Prix National des Arts et des Lettres : GPNAL)が贈られ、なかでも文学の部門では、詩、小説、短編、演劇、物語(contes)の各部門の大賞から三位までの作品に、政府による出版が約束されたのである。サンカラは1987年に起こったクーデターで暗殺されたけれど、その後もSNCとGPNALの精神は受け継がれ、催しは現在まで二年に一度開かれ続けている。この企画は、出版の機会を得られなかった作家たちを大いに勇気づけ、創作意欲をかき立ててきた。作家たちがこうしてようやく出版の可能性を考えられるようになったこの国では、作家を志す人、あるいは作品を発表したい人が続々と登場し、出版の方法を探している。たとえば、文化観光コミュニケーション省(Ministère de la Culture, du Tourisme et de la Communication)<sup>783</sup>の書籍読書局局長(Directeur de la Direction du livre et de la lecture)ママドゥー・カラントオ(Mamadou Karantao)氏は、小説の原稿を出版したいという若い作家たちの相談を頻繁に受けると証言している<sup>784</sup>。また、パリの書店ラルマッタ

<sup>781</sup> 以下のブルキナファソの文学創作に関する記述は、2008年2・3月の同国の首都ワガドゥグでの筆者の調査をもとにしている。また、ブルキナファソ文学全般の歴史についてはSanou 2000を参照した。

<sup>782</sup> ブルキナファソ(Burkina Faso)という国名は、1984年にそれまでのオートヴォルタ(Haute Volta)という植民地期以来の名称に代わってつけられた。当地の言語では「高潔な人々の国」を意味するという。

<sup>783</sup> 省のこの名称は2007年以降のものである。

<sup>784</sup> 2008年2月28日、ブルキナファソのワガドゥグにおけるカラントオ氏へのインタビュー

ン(L'Harmattan)のブルキナファソ支店長エルマン・ソメ(Hermann Y. Somé)氏は、リセの学生から大学教員、技術者から失業者までさまざまな社会階層の人々が出版の望みを託して、週に四本ほどは文学作品の原稿を店に持ち込んでくると証言している<sup>785</sup>。原稿の執筆者たちは少なくとも BEPC(brevet d'étude du premier cycle：前期中等教育修了証書)は取得していて、多くは大学卒業者だという。集まった原稿は、国立のワガドゥグ大学の教員などに査読してもらい、その中から年に 40～50 冊が出版されるという。ソメ氏によると作家志望者たちは、日々の生活苦、社会変革のための政治参加、異なる文化を持つ人間同士の出会いと葛藤など、自分の生きる社会での自分自身の問題からインスピレーションを受けて書いていると語っている。ここからは、経済上の困難を抱え、サンカラの暗殺後、長期間維持されているブレイズ・コンパオレ(Blaise Compaoré)政権のもと、政治的な自由があるとは必ずしもいえないこの国で、人々が自分自身の生きかたや社会の方向性について模索し、書いて表現することを支えにしていることがうかがわれる。

ダディエからタジョーへと時代は移り変わっても、アフリカ諸国の若者たちは相変わらず、夢や希望を実現させることはあまりに困難だと感じている。多くの国では経済も政治も行き詰まり、アフリカ人自身で現状を改善したいと考えても、どうすることもできないかに見える。だが現代作家タジョーの作品は、失望することなく、安易な解決方法にとらわれることなく、とにかく生き残ろう、時間がかかろうとも道を探し、支えあい、アフリカ人自身の過ちにも向き合いながら、生きよう、と語りかける。この地域の作家たちはどの時代にも、どうしたらこの社会を再生できるのかと問いながら作品を生み出してきた。そしてこれからもそうしていくことと思われる。前の世代をとらえていた思想や執筆の傾向を乗り越え、自分の道を模索したタジョーは、しばらくしたら若い作家に乗り越えられていくのだろうか。そのときにはどんな作品が書かれるのだろうか。作家たちの書く作品は、これから時間がたったとき、どのようなものとして読めるだろうか。いつの日かアフリカの作家たちは、こぞって自分の言語で書くようになるのだろうか。それはどのような思想と実践のうえでのことだろうか。これからも探求しなければならないことはあまりに多い。

---

一より。

<sup>785</sup> 2008年3月3日、ブルキナファソのワガドゥグにおけるソメ氏へのインタビューより。